

行山流供養塚鹿踊

郷土の企画展

民俗芸能の動物たち



川西大念仏剣舞
サルコ面　太鼓



小田代神楽　狐面

佐野向神楽　鳥舞

目次

ごあいさつ …… 1
本展示で紹介する芸能団体 …… 2
Ⅰ．演目に登場する動物たち …… 3
Ⅱ．装束に描かれる動物たち …… 8
Ⅲ．芸能をささえる動物たち …… 10
Ⅳ．鹿と権現と獅子 …… 14
展示資料一覧 …… 17

The Cattle Museum
牛の博物館



早池峰神楽の太鼓

佐野向神楽（江刺区稲瀬）

奥州市の民俗芸能で使われている太鼓のほとんどは、革を張った太鼓面を紐で締めつける「締め太鼓」です。早池峰山を霊場とする修験山伏が伝えた早池峰神楽では、太鼓の革に牛革を使い、マッチ棒のように先端がふくらんで尖ったばちで太鼓へのあて方を調節しながら、複雑な音色を出します。民俗芸能において、太鼓は舞の調子をリードする楽器で、太鼓を叩く人は舞を熟知した熟練者が務めます。

ごあいさつ

ニワトリは夜明けを告げる鳥、ヘビは水をあやつる恐ろしい存在、キツネやシカは豊作をもたらす神の使い。神・仏やその使いとなって民俗芸能に登場する動物の姿には、昔の人々の自然観が反映されています。人間にはどうすることもできない天候や病気など、人々の自然への畏敬の念が具現化したものがこういった動物達の姿であるともいえます。本企画展では、奥州市に伝わる神楽、剣舞、鹿踊などの民俗芸能に登場する動物たちを、地元資料とともに紹介します。また、太鼓には牛馬の革が、装束や採り物には鳥の羽が使われてきました。芸能を支えるこれらの動物達も紹介します。

この度は、奥州市内無形民俗文化財の保持団体を始め、たくさんの方々からお話をうかがい、貴重な装束・道具をお貸しいただきました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。これまでと違った角度から民俗芸能をとらえ、記録することで、郷土の信仰に多くの方が触れる機会となれば幸いです。

平成28年2月

奥州市牛の博物館
館長　内田　宏

本展示で紹介する芸能団体

岩手県は民俗芸能の宝庫といわれます。奥州市には81の国、県、市指定の無形民俗文化財保持団体が存在しており、芸能やそれを支える信仰を保存・継承しています。本企画展で紹介する芸能を本田安次に従って分類すると、下記のようになります。いずれも、民間の信仰に基づく神事や芸能で、人々の長寿・息災や五穀豊穣を願い、病気や災いをもたらす悪魔を払う人々の祈りが込められています。

神楽（かぐら） 神を呼び降ろし、神の前で祈祷と歌舞を行うもの。

佐野向神楽【早池峰神楽】
市指定無形民俗文化財
江刺区稲瀬



白鳥神楽【南部神楽】
市指定無形民俗文化財
前沢区



瀬台野神楽【南部神楽】
市指定無形民俗文化財
水沢区真城



川内神楽【南部神楽】
市指定無形民俗文化財
江刺区田原



小田代神楽【南部神楽】
市指定無形民俗文化財
江刺区田原



笹森神楽【南部神楽】
市指定無形民俗文化財
胆沢区小山



黒田助獅子舞【獅子舞】
市指定無形民俗文化財
水沢区羽田



中田太神楽【太神楽】
市指定無形民俗文化財
江刺区梁川



田楽（でんがく） 五穀豊穣を祈る、田に関する芸能。

都鳥田植踊【庭田植踊】
市指定無形民俗文化財
胆沢区南都田



風流（ふりゅう） 趣向をこらした飾りや装束を用いる舞踊。御霊信仰・疫神信仰に基づくもの。

行山流久田鹿踊【太鼓踊系鹿踊】
県指定無形民俗文化財
江刺区梁川



奥山行山流地ノ神鹿踊【太鼓踊系鹿踊】
市指定無形民俗文化財
江刺区伊手



川西大念仏剣舞【念仏剣舞】
国指定重要無形民俗文化財
衣川区



行山流供養塚鹿踊【太鼓踊系鹿踊】
市指定無形民俗文化財
胆沢区若柳



金津流梁川獅子躍【太鼓踊系鹿踊】
県指定無形民俗文化財
江刺区梁川



語り物・祝福芸 祝言をのべ、歌舞するもの。春駒や万歳、大黒舞などがあります。

渡来芸・舞台芸 大陸から伝来した伎楽など、およびそれらと結びついた芸能。奥州市に地歌舞伎や人形芝居が伝えられています。

Ⅰ.演目に登場する動物たち

ヘビ

ヘビは昔から、雨や川の水を司る水神としての性質を強く持っています。農耕に欠かせない水の恵みをもたらすとともに、怒らせると川を氾濫させる危険な側面もあり、人々はヘビを恐れ、敬ってきました。ヘビは川の神である仏教の弁財天と結びつき、農業の守り神としても信仰されています。

神楽

神座を設けて神を呼び降ろし、その前で清め・祓い・鎮魂の祈祷と歌舞を行うものです。奥州市内の神楽は、早池峰山を霊場とする修験山伏によって伝承されてきた「早池峰神楽（山伏神楽）」と、信仰の要素を残しながらも、明治以降に農民たちに支持されて発展した「南部神楽（科白神楽）」に大きく分けられます。南部神楽は平易なセリフと華やかな所作や衣装を取り入れた娯楽性の高さが特徴です。

■水を司る大蛇

日本書紀に登場する八岐大蛇は里を荒らし人々を苦しめる大蛇です。南部神楽でも素戔嗚尊による八岐大蛇退治の物語が演じられます。恐ろしい大蛇は「吊るし大蛇」の装置を使い、素戔嗚尊との激闘を表現します。

出雲の国へやってきた素戔嗚尊は、斐の川のほとりで娘稲田姫との別れを嘆き悲しむ老夫婦に出会います。話を聞くと、八面八頭の大蛇が現れて里を荒し人々を苦しめるので、毎年１人ずつ娘を生贄に差し出して大蛇を鎮めており、今年は稲田姫の番であるといいます。姫を自分の妻にすることを老夫婦に約束させると、姫のそばに樽酒を準備し、大蛇が酒に酔って油断した隙をついて、襲いかかります。素戔嗚尊は激闘の末、大蛇の首を落とし、大蛇の尾の先から三種の神器のひとつである天の叢雲の宝剣（草薙の剣）を取り出します。

この物語では八岐大蛇は氾濫を繰り返す斐の川の象徴ともいわれます。八岐大蛇を支配することで、稲作に欠かせない治水を人々が行えるようになったと読みとることもできます。



佐野向神楽保存会
（江刺区稲瀬）所蔵
演目：「金巻」



小田代神楽保存会
（江刺区田原）所蔵
演目：「本鐘巻道場寺」
「日本武尊」など



白鳥神楽保存会
（前沢区）所蔵
演目：「宝剣納め」
「田村二代」

蛇面

人に化けたヘビは、蛇面をつけて怪しく舞って演じられます。怨念や執着など、人間の邪性を表現する場合にも使用され、目や歯に使用される金色は人間を超えた霊力を表現しています。



本八岐大蛇退治
小田代神楽保存会（江刺区田原）

蛇頭は木製で、布製の蛇の胴体には赤く染めたもみ殻を入れておきます。最後に素戔嗚尊が蛇を打ち取る場面では、蛇頭を外し、もみ殻で血のしたたるようすを表現するなど、演出の工夫が見られます。

小田代神楽　【南部神楽】
市指定無形民俗文化財　　江刺区田原

小田代神楽は明治28年（1895）に、地元の五十瀬神社で舞われたのが最初と伝わっています。南部神楽に分類されていますが、羽黒修験の祈祷神楽に起源を持つ瀬台野神楽の教えを受けています。



吊るし大蛇
川内神楽保存会（江刺区田原）所蔵

奥州市周辺の南部神楽に登場するヘビは、吊るし大蛇と呼ばれる大がかりな装置です。やぐらから紐で大蛇を吊るし、紐を操ることで臨場感のある蛇の動きを再現します。



蛇頭
川内神楽保存会（江刺区田原）所蔵

創始当初に使用していた、吊るし大蛇の頭部です。

高山掃部長者
川内神楽保存会（江刺区田原）

高山掃部長者（左）と蛇面の妻（右）。妻の心情の変化とともに女面から蛇面に変わり、最後には大蛇の装置を使って完全な蛇の姿で村人を襲います。



川内神楽　【南部神楽】
市指定無形民俗文化財　江刺区田原

明治39年（1906）水沢羽田の鴬沢神楽の指導を受けて創始した踊組で、祈祷の舞の他に劇舞も多く継承しています。

■地元伝承の高山掃部長者物語

高山掃部長者の物語は、胆沢地方ゆかりの伝承物語で、南部神楽の演目にもなっています。高山掃部は、高山稲荷神社（現在の水沢区）周辺に屋敷を構えていた豪農です。その妻は欲が深く冷酷無慈悲な女でした。この頃、奥州一円は凶作のため大飢饉に襲われ、近隣の百姓は高山掃部に蔵を開けるよう懇願しました。高山掃部は反対する妻を離縁して、蔵の穀物を分け与えて村人を救済しました。追放された妻は悔しさのあまり大蛇の身となり、夫や息子を殺し、村人に襲いかかり、水をたたえた大きな堤の主となって大水害を引き起こします。

その大蛇が住み着く堤は神楽団体によって異なりますが、よく登場する「止々井の堤」は水沢から南都田にかけての地域に存在したと見られる沼地で、人々は大きな湿地帯に大蛇の存在を想像していたのではないでしょうか。大蛇は水を司って災害や農耕を支配し、ここでも蛇が水神として怖れ、崇められていることが分かります。

その後、大蛇に生贄として差し出された肥前松浦のさよ姫という娘が法華経の力で大蛇を成仏させます。前半の高山掃部長者の物語が胆沢地方独自の物語であるのに対して、後半の松浦さよ姫の説話は同様の物語が日本各地に分布します。

修験山伏が伝えてきた神楽

「南部神楽」に分類される神楽は、舞手自身がセリフを唱え、華やかな衣装に身を包み、信仰よりも娯楽の要素が強いと言われますが、中には祈祷色を強く残している団体もあります。

そのひとつが、水沢区真城に伝わる瀬台野神楽で、印や反閇など呪術や祈祷の舞型が残っています。これは、寛永年間から文久元年まで羽黒派修験の道場「日光院」で舞われていた「日光院祈祷神楽」を、文久元年に里人が復活させて瀬台野神楽となったためです。現在まで瀬台野神楽に継承されている神楽面には、江戸時代以前に使われていたと思われる古いものが残されています。江戸時代には、「法印」と呼ばれる修験山伏・密教僧・行者が里に定住し、加持祈祷・地鎮祭など庶民の信仰を支えるほか、医療・製薬などにたずさわっていました。祈祷の際に法印が奏した神楽を「法印神楽」と呼んでいます。

同様の法印神楽は、奥州市域に他にもあったようです。前沢区白山の八雲神社には、江戸時代まで羽黒派修験道場「五大院」がありました。こちらの神楽は瀬台野神楽のように民間人の神楽にはならず、明治の修験道廃止によって廃絶したと思われます。残念ながら水害などにより古文書類が残っておらず五大院の詳細は不明で、10面の神楽面が残るのみです。面の中には、古い形式の能面の特徴を示すものもあることから、法印神楽が早くから能の仮面を取り入れていたことが分かる貴重な資料です。

瀬台野神楽面
瀬台野神楽保存会
（水沢区真城）所蔵



瀬台野神楽の面は、製作年がはっきりと分かるものはありませんが、少なくとも江戸時代の製作で、中には桃山時代の作と伝わる面もあります。完成された能面や狂言面をまねたものが多いとされ、女面、鬼面、荒面、尉面、般若面、道化面、狐面、猿田彦面など30の面が現存しています。

八雲神社仮面
八雲神社
（前沢区白山）所蔵



江戸時代末までは、羽黒派修験道場であった「五大院」において、祈祷や修行のための法印神楽が舞われていたようです。面の中には寛永と墨書されたものがあり、古い形式の能面の特徴を示すものもあります。女面、鬼面、尉面、般若面など10の面が残されています。

キツネ

キツネは稲荷明神の使いとされ、稲荷の由来である「稲生り」のとおり、農耕・食べ物を司ると考えられてきました。一方で、人の欲望につけこむ妖怪としてのイメージも持ち合わせています。人々にとってのご利益と脅威の両面を併せ持つキツネは、まさに自然の象徴であったといえます。

■神に扮する

神楽では、最初に必ず演じる「式舞」や神代の物語を演じる「神舞」が重要です。

南部神楽に分類される神楽団体の中でも信仰の要素を色濃く残す瀬台野神楽（水沢区真城）や前谷内神楽（胆沢区若柳）とこれらの弟子神楽では、神舞のひとつに狐面をつけて神に扮する「明神舞」があります。明神舞は荒れすさぶ悪霊や害獣を鎮める舞で、悪魔を払い、天下泰平、延命息災、五穀豊穣を祈念します。

佐野向神楽（江刺区稲瀬）では、「五穀舞」に白狐が登場します。稲荷大明神の使いとなって、五穀を守護するよう命じられます。

ちなみに、この地方では、屋敷神として「明神祠」を屋敷内に設ける習慣があります。



明神舞
笹森神楽保存会
（胆沢区小山）
狐面をつけ、刀と幣束を持ち、地面を踏みしめる祈祷の舞です。

笹森神楽　【南部神楽】
市指定無形民俗文化財　胆沢区小山
大正９年（1920）、胆沢の前谷地神楽に学んだ舞手の指導を受けて創始された、南部神楽（科白神楽）のひとつです。胆沢区内の他の団体にはない、「明神舞」、「地割舞」といった悪魔払いの祈祷舞を継承しています。

■悲哀物語の女狐

南部神楽には、劇仕立てで説話や地元の伝承物語を演じる「劇舞」があります。人形浄瑠璃や歌舞伎と共通する演目も少なくありません。「篠田の森」もそのひとつです。

この物語は、女狐が主人公の悲哀物語です。篠田の森で安倍保名（阿部安名）に命を助けられた狐が、葛の葉姫に変身して保名の前に現れ、やがて息子をもうけます。しかし、狐は自身の正体を知られることを恐れ、幼いわが子を残して森に帰ります。母と子の最後の別れが涙をさそう場面で、もの悲しく葛の葉姫の心情が演じられ、場面によって狐面と女面を使い分けます。団体によって「篠田が森」「狐狩り」「安倍保名の物語」「忍田」などの呼び名があります。



（雄）



（雌）

小田代神楽保存会（江刺区田原）所蔵
演目：「明神舞」「篠田が森」など



笹森神楽保存会（胆沢区小山）所蔵
演目：「明神舞」「忍田」など



（雄）



（雌）

瀬台野神楽保存会（水沢区真城）所蔵
演目：「明神舞」「篠田が森」など



佐野向神楽保存会（江刺区稲瀬）所蔵
演目：「五穀舞」など

狐面
瀬台野神楽や同じ系統の小田代神楽では、狐面が対になっており、明神舞は２神の舞となります。口を開いた「阿面」は雄狐、口をとじた「吽面」は雌狐です。佐野向神楽では、右手を前に出すのが雄狐、左手を前に出すのが雌狐、と構えで雌雄を演じ分けています。

シカ

縄文時代から続く狩猟の対象であり、人とのかかわりが深い動物です。毎年生え変わる角が生命力を連想させることから、シカは山の神の力を象徴する霊獣とされます。鹿島神宮や春日大社ではシカが神の使いとされ、鹿島神宮では鹿園で、春日大社では奈良公園周辺で生きたシカが大切にされています。

■鹿踊の由来

鹿が群れて踊る鹿踊の由来は、団体によってさまざま伝えられていますが、狩猟獣としての鹿への供養や、神の使いとしての鹿への崇敬が込められているようです。江刺区の奥山行上流餅田鹿踊では、鹿をかばって夫の猟銃の玉にあたって死んだ妻の墓で、八頭の鹿が柳の枝をくわえて回っているのを見て感動した夫が、鹿の皮を着て踊った供養踊りに始まるといいます。水沢区の奥野流富士麓行山鹿踊では、香取神・鹿島神の使いとして春日大社に奉納した踊りだといいます。

鹿踊

奥州市内の鹿踊は鹿自らが太鼓を叩きながら踊る「太鼓踊系鹿踊」に分類され、８頭の鹿が舞い踊ります。踊手の頭には鹿角がついたカシラ、腰には太鼓、背には２本のササラを霊の依代としてつけています。盂蘭盆前後、祖先供養と新仏供養のために求めに応じて、民家、寺、墓地等で演舞されるほか、秋祭りに招かれて五穀豊穣を祈願して踊られています。



金津流梁川獅子躍【太鼓踊系鹿踊】
県指定無形民俗文化財
江刺区梁川



行山流供養塚鹿踊　【太鼓踊系鹿踊】
市指定無形民俗文化財
胆沢区若柳



大旆　行山流久田鹿踊踊組（江刺区梁川）　所蔵

踊組では「おおはた」と呼んでいます。享保２年（1717）、鹿踊唄を聴いた仙台藩主伊達吉村が野手崎村領主小梁川氏に命じて、仙台にて行山流久田鹿踊を鑑賞。その時に踊組が賜った大旆と伝わっています。大旆には、鹿踊の起源の物語の場面－奈良の春日大社とみられる境内で、僧のもとに集まる鹿の群れが描かれています。



行山流久田鹿踊【太鼓踊系鹿踊】
県指定無形民俗文化財
江刺区梁川

慶長４年（1599）創始と、奥州市で最も歴史のある鹿踊の踊組で、鹿踊の古い形態を残していると考えられています。また、「坊子」と呼ばれる少年が鹿と共に踊る点でも、市内の他の鹿踊とは一線を画しています。

サル

サルは時おり山から里へ下りてくる動物で、山の霊力をもたらすと考えられました。サルは日吉神社の山王神の使いとされ、無病息災、不老長寿をもたらすとされます。サルは大切な家畜であるウマやウシを守ってくれると信じられ、厩にサルの骨を祀る「厩猿」など、サルを守り神とした信仰が各地に存在しています。



入剣舞
川西大念仏剣舞保存会（衣川区）
「怒者（亡者）」「サルコ」「ワカド」が登場し、かつては十三仏信仰から13人で舞っていました。

川西大念仏剣舞　国指定重要無形民俗文化財　衣川区
サルコは全身赤い装束に身を包み、猿の面をつけます。扇、綾竹、刀と採り物を変えて踊り、最後にサルコと「怒者」という亡者が激しく渡り合って争い、怒者を一人ずつ成仏させていきます。毎年、中尊寺の施餓鬼供養で舞が奉納されています。

■亡者を成仏させる

奥州市に伝わる念仏剣舞では、猿は念仏信仰と強く結びついています。胆沢区、衣川区などの念仏剣舞には、釈迦の使い、あるいは釈迦の化身ともいわれるサルコやカッカタと呼ばれる猿が登場します。サルコは成仏できずにいる亡者の魂である怒者と交わって、扇を使って怒者を浄土へ導くしぐさをして救済していきます。

衣川区の川西大念仏剣舞に伝わる伝書「剣舞由来」によると、前九年、後三年の役で死んだ亡魂が現れて住民を脅かすので、藤原清衡が山王権現社に籠って７日７夜のお祈りをしました。満願の日、一匹の猿が出現し、亡者たちと交流して彼らを成仏させ、猫間ヶ渕に魂を鎮めていきました。この猿の舞を模してつくらせたのが念仏剣舞で、以降、清衡は亡者供養のためにこの舞を踊らせたといいます。念仏剣舞には念仏によって衆生を悟りへ導く済度への祈りが込められています。





サルコ面　　押っ込み面
剣舞面　川西大念仏剣舞保存会（衣川区）所蔵

剣舞
念仏回向・浄土欣求などを祈って踊られる念仏踊りの一種です。悪霊を踏み鎮め、邪気を払う呪法である「反閇」の呪術的性格と、衆生を救済する念仏信仰的性格を併せ持っています。
奥州市では、胆沢区、衣川区にいかめしい面をつけた亡者が激しく踊る念仏剣舞が、江刺区には少年達が中心となるちご剣舞が伝承されています。供養のための舞で盂蘭盆を中心に寺や墓所で踊るほか、新仏の家を回って踊ります。

Ⅱ.装束に描かれる動物たち

ニワトリ



鳥兜につけるニワトリ
佐野向神楽保存会
（江刺区稲瀬）所蔵
雄鶏（左）と雌鶏（右）が対になっています。

奥州市胆沢区の角塚古墳（５世紀）から儀式用とみられるニワトリ形埴輪が出土しており、古代からニワトリが特別な力を持つと考えられていたようです。ニワトリは朝の到来を告げ、邪気悪霊を払う鳥、「一番鶏」ともいわれます。その役割を象徴するのが日本書紀の天岩戸開神話です。天岩戸にこもった、太陽神の天照大神を導き出すために神々が試みたひとつが長鳴鳥（ニワトリ）を集めて鳴かせることでした。

■舞い踊る鳥たち

神楽の最初に舞われる「御神楽」は、天岩戸開神話で、鶏をたくさん集めて鳴かせ、踊らせた様子を舞にしたものです。

早池峰神楽では、演目の始めに舞われる舞を「鳥舞」と呼びます。「御神楽」や「鳥舞」の鳥兜にはオシドリやニワトリなど、雄と雌の鳥が対になって飾られています。



御神楽
白鳥神楽保存会
（前沢区）

白鳥神楽　【南部神楽】
市指定無形民俗文化財　　前沢区
大正９年（1920）、衣川の川内神楽より指導を受けて塔ヶ崎神楽として創始された南部神楽のひとつです。

佐野向神楽　【早池峰神楽】
市指定無形民俗文化財
江刺区稲瀬
嘉永６年（1853）、土沢神楽（現在の花巻市東和町）を伝授されて始まりました。早池峰神楽の大償系神楽に属し、優美な舞型を継承しています。セリフにあたる舎文（言い立て）を舞手ではなく幕の裏で唱えるのは早池峰神楽の特徴です。



鳥舞
佐野向神楽保存会
（江刺区稲瀬）

コイ

中国では古くからコイは霊性を持ち、滝を昇って竜に化けるといわれていました。コイの滝昇りは生命力がみなぎり、立身出世を象徴する図像です。



鳥兜（鳥舞用）
佐野向神楽保存会
（江刺区稲瀬）所蔵
水の上をはねる鯉が精緻な刺繍で描かれています。

カメ

めでたいことを知らせる動物として古くから大切にされてきました。また、カメは長生きで、千歳を過ぎると物事の吉凶を予測できると考えられていました。





鳥兜（山の神用）
佐野向神楽保存会（江刺区稲瀬）所蔵
「山の神」は最も荒々しく激しい舞で、霊力が強いと考えられた亀があしらわれました。

獅子

獅子は大陸から日本へ伝えられた霊獣です。例えば、文殊菩薩が獅子の背中に乗る姿で描かれ、神社の狛犬は魔除けの守護獣です。

■唐獅子牡丹

鹿踊の袴の後ろには、獅子と牡丹が配置された唐獅子牡丹がよく描かれます。唐獅子牡丹は中国の唐の時代にできた図案で、「百獣の王」である獅子と「百花の王」である牡丹の組み合わせが古くから好まれてきました。薬草である牡丹の夜露には、獅子の身を内側から蝕む「獅子身中の虫」を遠ざける力があると言われており、そのため獅子は夜になると牡丹の木の下で休むとされています。



袴
行山流久田鹿踊踊組
（江刺区梁川）所蔵



袴
金津流梁川獅子躍
（江刺区梁川）所蔵



袴
奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
（江刺区伊手）所蔵

龍

天地を自在に行き来し、水を支配する霊獣です。ヘビと同様、川や池、湖の主で、田畑に水をもたらす、五穀豊穣の神です。一方で荒ぶると雷や嵐を引き起こすため、人々から恐れられる存在でもあります。

■倶利加羅龍

鹿踊の頭から背中に垂れる「流し」という部分に、龍が巻きついた剣が描かれています。不動明王の象徴である倶利加羅剣に龍が巻きついています。不動明王は「貪りの心」「怒りの心」「愚痴の心」の三つの煩悩を破し、人々を救うとされています。



鹿踊流し
奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
（江刺区伊手）所蔵

Ⅲ. 芸能をささえる動物たち

鳥の羽

舞手の頭の「ザイ」や舞いの際に手に持つ「採り物」を鳥の羽が飾ることも多くあります。ニワトリなど、身近で手に入る羽を使用することが多いですが、美しさを求めてヤマドリやキジの羽を拾い集めることもありました。



鳥ザイ
川西大念仏剣舞保存会
（衣川区）所蔵
「三人怒者」という演目で「怒者」の役が頭につけ、動きを強調します。かつてはキジの羽で作っていましたが、現在のものはニワトリの羽でできています。



羽根
都鳥田植踊保存会
（胆沢区南都田）所蔵
「奴」と呼ばれる人の採り物で、稲の苗の形を象徴しています。奴自らが自分の羽根を作成していました。ニワトリの羽の軸を麻糸で縫って束ね、竹の棒に巻きつけて作ります。



腰差
行山流久田鹿踊踊組
（江刺区梁川）所蔵
ササラの代わりに鳥羽製の「腰差」をつけるのは他の鹿踊には見られない独特な形態です。ニワトリのほか、キジやヤマドリの羽根の軸を縄で編んで１枚にしたものを、竹の棒に筒状に巻きつけて作ります。

田植踊

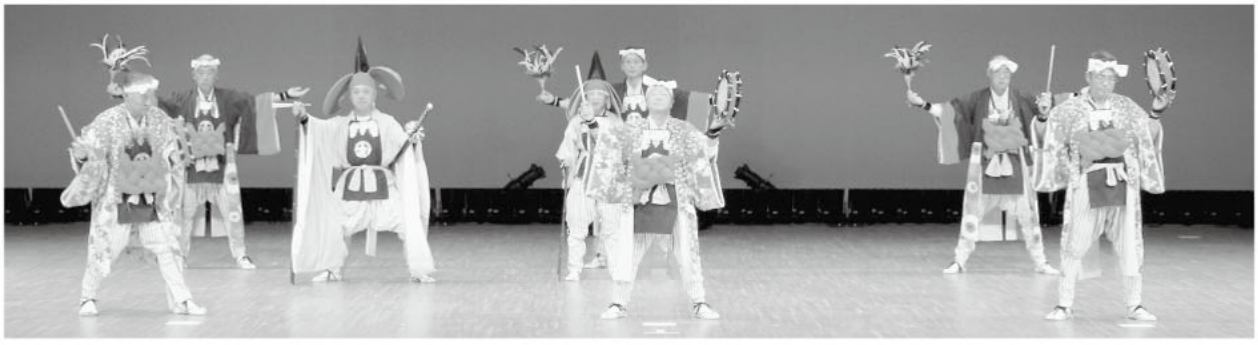
春の田起こしから秋の稲刈りまでの一連の農作業を模擬的に演じ、１年の農作業の工程をなぞることで、神々に豊作を印象付け約束させようとする芸能です。奥州市内には、庭（土間）や戸外で踊る水沢区、胆沢区、衣川区の「庭田植」と、座敷で踊る江刺区の「座敷田植」があります。

小正月に豊作を祈って、家々をまわり、各家の土間で踊りました。主役である「杁摺」と農家の下男役である「弥十郎」の掛け合いで田起こしから御倉への収納までの作業を話題にし、「奴」（羽根を持つ人）と「鞨鼓」（太鼓を持つ人）の踊りで実際の農作業を抽象的に表現しています。

都鳥田植踊

市指定無形民俗文化財
胆沢区南都田
伝承によれば、寛永６年（1629）３月３日、肝煎千田美濃が青年たちに踊らせて以来、300年以上も踊り継がれてきた「胆沢型」とも分類される予祝芸能です。

本田植踊
都鳥田植踊保存会（胆沢区南都田）



太鼓の皮

太鼓の皮として使用されてきた牛の皮と馬の皮。どちらも民俗芸能で欠かせない存在です。牛皮と馬皮の性質の違いが太鼓の音の違いを生み、芸能の多様性を生み出しています。

動物の皮膚を剥いだままの状態を「皮」、毛皮を取り除いてなめした状態のものを「革」といい、それらを併せて「皮革」といいます。英語では前者を「skin」、後者を「leather」と明確に区別しますが、日本では革のことを皮と表現することもあります。この企画展では、地域の太鼓店が「皮」を用いていることから「太鼓の皮」として統一しました。

■民俗芸能の太鼓

奥州市の民俗芸能で使われる太鼓は、ほとんどが締め太鼓です。締め太鼓とは、あらかじめ皮を鉄の輪にはめ、２つの輪で胴をはさんで両側から紐で絞めて固定する太鼓で、紐を強く締めれば皮が張り、より甲高い音を出すことができます。胴の部分は、桶のように何枚もの細長い板を「たが」で絞めて円柱状にして作ります。

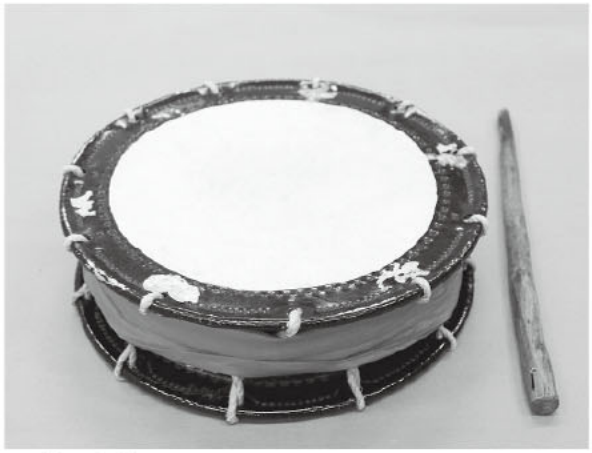


胴



鉄輪

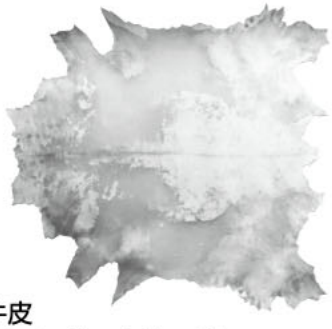
神楽用太鼓
菊美太鼓店（江刺区愛宕）所蔵



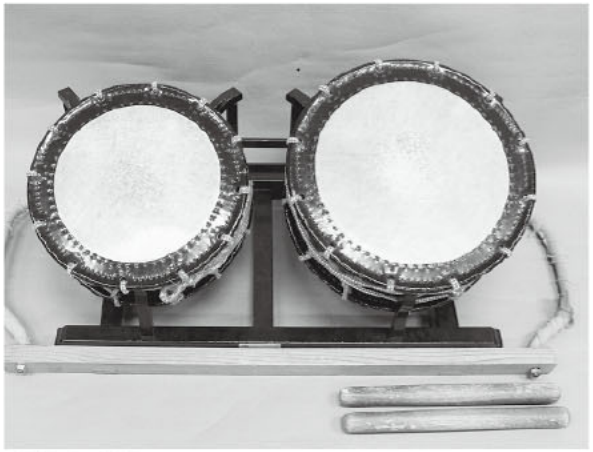
田植踊太鼓
都鳥田植踊保存会（胆沢区南都田）所蔵
「鞨鼓」と呼ばれる人が、「歌上」と「笛吹」の唄と笛に合わせて踊りながら太鼓をたたきます。小さな締め太鼓を左手に持ち、右手にもったバチで太鼓を叩きます。太鼓は馬皮製で、鉄のふちをたたいても割れない、固めの木材をバチに使用します。

■馬の皮と牛の皮

馬皮は薄く、高く響く音色を出すので南部神楽や鹿踊の太鼓に使われることが多いです。一方で、牛皮は馬皮に比べて伸びにくく、丈夫で力強く打っても破れにくい特徴があります。早池峰神楽や剣舞の太鼓には牛の皮が使われ、丸みを帯びた音色を発します。同じ牛皮でも、ホルスタイン種の皮は面積が広くて厚い一方伸びやすいので、引っ張りに強い和牛の方が和太鼓に適していると言われます。



太鼓用牛皮
菊美太鼓店（江刺区愛宕）所蔵
牛１頭の全身の皮です。背中側（中央部）ほど皮が厚く、腹側（周辺部）ほど皮が薄いです。芸能の種類に合わせて皮を切りとる場所を選び、張り具合を調整します。



太神楽太鼓
中田太神楽保存会（江刺区梁川）所蔵
太鼓は胴が短い締め太鼓を２つ台に乗せて演奏します。大きな太鼓は高い音を、小さい太鼓は少し低い音を出します。かつての太鼓は猫皮でできていたといいますが、現在の太鼓は牛皮製です。バチは太めで、軽くて柔らかいキリの木でできています。囃子は太鼓に手平鉦と篠笛が加わります。



剣舞太鼓
川西大念仏剣舞保存会（衣川区）所蔵

囃子は太鼓と篠笛で、「胴前」が太鼓を打ちながら念仏歌を唄います。革には牛の皮を使用しています。バチは柔らかめで繊維が細かいホオの木でできています。



鹿踊太鼓
行山流供養塚鹿踊（胆沢区若柳）所蔵

踊手の腰に太鼓を下げ、自ら口唱唄を唄いながら太鼓を打ちます。中立とよばれる中心となる踊手が、太鼓で全体をリードします。太鼓は馬皮製で、高く響く音が出ます。樹脂で描かれた猫足と呼ばれる模様が特徴的です。激しく踊りながら太鼓を叩くので、バチは強くてしなりのあるムラサキシキブの木などを使用します。



神楽太鼓　【早池峰神楽】
佐野向神楽保存会（江刺区稲瀬）所蔵

早池峰神楽では、比較的小型で牛皮を用いる太鼓が多く見られます。牛皮は丸みのある音を出し、安定したリズムを刻みます。早池峰神楽では、バチに硬さとねばりがあるクワなどの木を使い、先端がマッチ棒のようにふくれてとがっています。バチの皮への当て方を微妙に変えて、音に表情をつけます。囃子は太鼓が中心となり、篠笛、手平鉦が伴います。



神楽太鼓　【南部神楽】
白鳥神楽保存会（前沢区）所蔵

南部神楽では、胴径が大きな太鼓を使います。南部神楽では音が高く響く馬皮を使うことが多いですが、白鳥神楽のこの太鼓は牛皮製です。太鼓の打ち方も軽快で、テンポも速く、劇舞では情景や舞手の心情を表す効果音の役割を果たします。左右のバチを曲芸的にまわしながら太鼓を打つバチ車は、「胴取」の技を見せる演出のひとつで、会場を盛り上げます。囃子は太鼓が中心となり、手平鉦の他に一部の団体では篠笛が伴います。

ウマの尾

ウマの尾はよくしなり、毛が長いので加工しやすく、民俗芸能の道具や装束に用いられてきました。鹿踊や神楽、剣舞で舞手の頭を飾る「ザイ」は頭を激しく振ると大きくなびき、舞の躍動感を演出します。









鹿踊　ザイ
奥山行山流地ノ神鹿踊保存会（江刺区伊手）所蔵
鹿踊の頭に、馬の尾の毛を束にしたザイがつけられています。ザイを振ると頭の動きがより大きく見えます。

剣舞　毛ザイ
川西大念仏剣舞保存会（衣川区）所蔵
「一人怒者」の演目で亡者役の「押っ込み」が頭につけます。





神楽　ザイ
小田代神楽保存会（江刺区田原）所蔵
顔の動きを強調します。女役用の長いザイもあります。

シカの角

鹿踊の頭には２本の角があります。角の内側をくりぬいて軽くし、踊りやすいように加工してあります。





鹿角
奥山行山流地ノ神鹿踊保存会（江刺区伊手）所蔵
ニホンジカの角の表側を削って表面を白くし、後側は中の芯をくりぬくように削って軽量化をはかります。現在では樹脂製の鹿角が多く、鹿角の実物を使う団体は少なくなっています。

Ⅳ.鹿と権現と獅子

北から伝播してきた早池峰神楽の権現舞と、南から伝えられた太神楽や鹿踊。これらは発祥の地域も異なれば、伝播してきた時期も異なります。奥州市の鹿頭、権現頭、獅子頭の形態を見てみると、芸態や所作の違いを保持しながらも、顔つきは似通っていることが分かります。異なる芸能が出会い、互いに影響を及ぼしあって現在の形になってきたようすを見ることができます。

■鹿踊の鹿頭・獅子頭

鹿踊は１人の舞手が１頭の鹿を演じる１人立ちの芸能で、２人以上で演じる権現舞や獅子舞と区別することができます。頭に鹿の角を掲げ、大きな目と豊富なザイが特徴的です。

奥州市内で最も古い鹿踊の踊組である行山流久田鹿踊の細身で小さな鹿頭は鹿踊の最初の頃の姿を示唆していると考えられています。

一方で、他の奥州市域の鹿踊の頭は大きく、誇張された目鼻立ちの鹿頭です。大きな鼻とめくれ上がった口元には早池峰神楽などの権現頭の影響を感じます。



鹿頭　行山流久田鹿踊　【太鼓踊系鹿踊】

江刺区梁川

慶長４年（1599）に仙台城下八幡堂踊より伝えられ、仙台の八幡堂系鹿踊から行山流鹿踊への中間的な形態であるとされています。笛の囃子が伴う点や、腰差が鳥羽製で短い点など仙台鹿踊の特徴を残しています。



鹿頭　行山流供養塚鹿踊　【太鼓踊系鹿踊】

胆沢区若柳

口伝によると、安永年間（1770年代）、達谷窟で伝授され踊組を組織したことに始まります。頭から背中の流しを飾る「華鬘」がなく、ザイの根元が見えています。奥歯が犬歯状にギザギザになっています。雌鹿には角はありません。



鹿頭　奥山行山流地ノ神鹿踊　【太鼓踊系鹿踊】

江刺区伊手

文政４年（1821）、東磐井郡大原村（現在の一関市大東町）から伝授されて始まりました。奥歯が犬歯状にギザギザになっているのが地ノ神鹿踊の特徴です。また、以前の鹿頭は上の歯と下の歯の間に隙間がありました。現在は雌鹿にも小さな角がありますが、昔は細い竹でした。



獅子頭　釜津流梁川獅子躍　【太鼓踊系鹿踊】

江刺区梁川

宮城県志田郡次橋村（現在の志田郡松山町）から江刺郡石関村（現在の江刺区稲瀬）を経て栗生沢村に文政11年（1828）に伝えられました。大きな頭に、頭から背中の流しを飾る「華鬘」という赤い飾りが華やかです。ザイで鋭い目が隠されています。

■権現と獅子

早池峰山を霊場として発展してきた修験山伏の神楽では、神がこの世に姿を変えて現れたとする「権現」を信仰しています。早池峰神楽の神楽衆は権現頭を奉じて権現舞を行い、村々を巡業しました。権現舞では、権現の幕の下を通る「胴くぐり」、頭を噛んでもらい息災延命を願う「身固め」、歯を打ち鳴らして悪魔を退散させる「歯打ち」などを行います。民家を訪れる場合にはひしゃくを口にくわえ、かまどに水をかける「火伏せ」の祈祷を行います。

一方、伊勢神宮代参から始まったとされる太神楽では、獅子頭は神や仏ではなく、聖獣の「獅子」とされ、悪霊退散のための祈祷舞を行います。顔が赤く、幕に矢車模様が染め抜かれています。権現舞のような歯打ちや頭を噛む動作はありません。

水沢区・江刺区に分布する権現舞・獅子舞は、これらの中間的な特徴を持っています。瀬台野神楽では「権現獅子」、黒田助獅子舞では「おしし権現様」と呼ばれ、「権現」と「獅子」の区別が曖昧になっています。名称だけでなく、可動式の耳や舞の所作も早池峰神楽の権現舞とは明らかに異なり、もともとは太神楽もしくは法印神楽の獅子舞であったものに、早池峰神楽の権現舞の特徴が加わったものであると考えられます。悪魔となった獅子が太刀取りになだめられるくだりは修験山伏系の獅子舞に見られるものです。一方で、歯を打ち鳴らしたり、人の頭をかんで無病息災を願う所作は、明治以降に里人にも広まった早池峰神楽の権現舞の影響であると考えられます。長い年月の間に、さまざまな信仰と芸能が奥州市域を舞台に出会い、現在の芸能の姿になってきたのです。



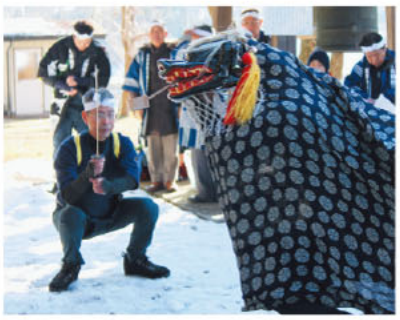
権現舞【早池峰神楽】
佐野向神楽保存会
(江刺区稲瀬)
神がこの世に現れた姿であるので、権現頭を高くかかげます。



獅子舞【太神楽】
中田太神楽保存会
(江刺区梁川)
舞の中で、前の舞手が獅子頭をかぶり、手に鈴と幣束を持ちます。



権現獅子舞
瀬台野神楽保存会
(水沢区真城)
この地方では珍しい3人立ての獅子舞です。人の頭をかんで無病息災を祈ります。



黒田助獅子舞
黒田助獅子舞保存会
(水沢区羽田)
太刀取りと対峙する悪魔祓いの獅子舞です。最後にひしゃくの水をまいて火防を祈ります。



権現頭　佐野向神楽【早池峰神楽】
佐野向神楽保存会（江刺区稲瀬）所蔵
創始の嘉永６（1853）年より山伏神楽の大償系神楽の権現舞を継承しており、演目の最後や神事で権現舞が舞われます。平成４年（1992）に現在の権現頭を新調。顔は黒色、頭のザイは和紙製で歯は黒く、尾の先が剣となっています。下舞で場を清めてから権現舞に入り、2人立てで舞います。江刺区稲瀬地区には10にも上る権現舞がありますが、それらは佐野向神楽を師匠とするもので、遠くは胆沢区にまで伝えられました。30年ほど前までは旧暦12月24日に「権現様のお年越」といって祖先をまつり、「歯打ち」をしたり、頭をかんだり幕の下を人が通る「胴くぐり」をして子どもの健康や安産を願いました。新築祝いにも権現舞が行われ、「歯打ち」をしながら家中を歩いたといいます。現在でも春分、秋分の日の地元愛宕神社のおまつりの日に権現回しを行っています。

太神楽

太神楽は、伊勢神宮・熱田神宮の神官が獅子頭を持って神への悪魔祓いや疫病退散を目的に全国を巡回し、地方の信者の参拝の代行「代参（代神楽）」を行ったことが始まりと言われます。江戸や上方では、寄席に進出し、曲芸を中心にその演目の大半が寄席の脇芸として定着しましたが、地方では獅子舞や祝祷舞を主体に伝承されてきた地域が多く、今日においても神事芸能としての側面が色濃く残されています。

岩手県では文化年間以降、南部藩庇護のもと「七軒丁」と呼ばれる大神楽師がおり、県内に太神楽を伝承しました。



権現頭　川内神楽　【南部神楽　瀬台野系神楽】

川内神楽保存会（江刺区田原）所蔵

川内神楽の創始の明治39年（1906）よりも前の明治30年（1897）に権現頭を新調したと記録があり、神楽よりも古くからこの地に継承されてきた権現舞であると考えられます。顔は黒く、ザイは馬の毛で、歯は金色、耳は紐で吊るされ、尾の先は丸く周囲を麻で装飾されています。２人立ての権現舞で、下舞ののちに権現舞に入り、太刀持ちが刀を振りかざす場面があります。歯打ちや頭をかむ動作をして無病息災を祈ります。戦前までは旧暦小正月から２月８日の間に各戸をまわる門付けを行っていました。昭和の後半から平成５年（1993）までは１月２日か３日に全戸門付けをおこない、家内安全、悪病退散、五穀豊穣を祈願しました。門付けの際には猿田彦が権現を先導し、手作りのお札を配布しました。



権現獅子頭　瀬台野神楽　【南部神楽　瀬台野系神楽】

個人（水沢区真城）所蔵

江戸時代まで羽黒系修験道場であった瀬台野日光院で継承されてきた権現獅子頭で、文政６年（1823）の銘があります。顔が赤く、ザイは麻製、歯は黒く、耳と舌は紐で吊るされています。幕には矢車紋が染め抜かれています。日光院祈祷神楽の廃絶後、明治20～30年頃に伝染病が流行した際、瀬台野神楽の踊手によって悪病退散のために「権現様神事」が始められ、毎年１月17日（昭和33年からは第３日曜日）に行われてきました。この地域では珍しい３人立ての権現舞で、本来尾は作られておらず、後ろの舞手が幕の上に幣束を立てて歩きます。猿田彦が先導し、神楽面をつけた神楽衆が行列を作って歩きました。かつては集落全戸をまわって権現舞を行い、歯を打ち鳴らしたり人の頭をかんで無病息災を願いました。舞の途中、権現に対して刀を振りかざす場面があります。



獅子頭　中田太神楽　【太神楽】

中田太神楽保存会（江刺区梁川）所蔵

明治22年（1889）頃、旧和賀郡浮田村より指導を受けて創始。現在の獅子頭が４代目です。集落で疫病がはやり、それを取り除くために悪魔祓いの獅子舞を奉じたのが始まりとされています。顔は赤く、ザイは紙製、歯は金色で舌と耳は可動式です。２人立ちの獅子舞で、祈祷の舞では前の人が獅子頭を被って手に御幣と鈴を持ち、悪霊退散と五穀豊穣を祈ります。獅子舞のほかに大黒舞や萬歳が継承されています。毎年９月第２土曜日の地元松尾神社例大祭にて太神楽が奉納されています。幕には矢車紋が染め抜かれており、尾の部分は幕が長くなっています。獅子頭自体が信仰の対象ではなく、人の頭をかんだり歯打ちをすることはありません。



獅子頭　黒田助獅子舞　【獅子舞】

黒田助獅子舞保存会（水沢区羽田）所蔵

始まりは不詳。延享３年（1746）の銘がある法印神楽系の締め太鼓が現存します。戦後中絶しましたが、昭和41年（1966）に青年会によって「黒田助獅子舞」として再興されました。顔は黒色、ザイは馬尾製（戦前までは和紙製）、歯は金色で、耳はひもで下げられています。幕は渦巻き紋が白く染め抜かれ（かつては無紋）、尾は麻製で、2人立ちで舞われます。毎年旧暦２月８日（現在は2月上旬の休日）に千養寺を出て、集落の全戸を門付けしてまわります。各家の玄関で、悪魔になった獅子舞が家に入ろうとするのを太刀取りが太刀をふりかざして阻止する悪魔祓いをし、ひしゃくの水を家にまいて火防を祈ります。歯打ちを行い、家の人の頭をかんで一年の無病息災を祈ります。

展示資料・写真一覧

資料名	地域	所蔵
吊るし大蛇	江刺区田原	川内神楽保存会
蛇面	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
蛇面	江刺区田原	小田代神楽保存会
蛇面	前沢区白鳥	白鳥神楽保存会
蛇頭	江刺区田原	川内神楽保存会
蛇面	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
蛇面	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
蛇面	前沢区白山	八雲神社
蛇面	前沢区白山	八雲神社
狐面（雄）	江刺区田原	小田代神楽保存会
狐面（雌）	江刺区田原	小田代神楽保存会
狐面	胆沢区小山	笹森神楽保存会
狐面（雄）	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
狐面（雌）	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
狐面	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
大旆	江刺区梁川	久田鹿踊組
サルコ面	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
サルコ装束	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
サルコ用毛ザイ	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
綾竹	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
押っ込み面	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
烏兜（烏舞用）2点	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
烏兜（山の神用）	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
袴	江刺区梁川	金津流梁川獅子躍
袴	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
袴　2点	江刺区梁川	行山流久田鹿踊踊組
こて	江刺区梁川	行山流久田鹿踊踊組
脚絆	江刺区梁川	行山流久田鹿踊踊組
鹿踊流し	胆沢区若柳	行山流供養塚鹿踊
獅子躍流し	江刺区梁川	金津流梁川獅子躍
鹿踊流し	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
鹿踊流し	江刺区梁川	行山流久田鹿踊踊組
鳥ザイ	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
羽根	胆沢区南都田	都鳥田植踊保存会
腰差　2点	江刺区梁川	行山流久田鹿踊踊組
神楽用太鼓　胴	江刺区愛宕	菊美太鼓店
神楽用太鼓　鉄輪	江刺区愛宕	菊美太鼓店
太鼓用牛革	江刺区愛宕	菊美太鼓店
田植踊太鼓	胆沢区南都田	都鳥田植踊保存会
田植踊太鼓 ばち	胆沢区南都田	都鳥田植踊保存会
太神楽太鼓	江刺区梁川	中田太神楽保存会
太神楽太鼓 ばち	江刺区梁川	中田太神楽保存会
太神楽太鼓 太鼓台	江刺区梁川	中田太神楽保存会
剣舞太鼓	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
剣舞太鼓　ばち	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
鹿踊太鼓	胆沢区若柳	行山流供養塚鹿踊
鹿踊太鼓　ばち	胆沢区若柳	行山流供養塚鹿踊
神楽太鼓	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
神楽太鼓　ばち	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会

資料名	地域	所蔵
バチ材　クワノキ	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
神楽太鼓	前沢区	白鳥神楽保存会
神楽太鼓　ばち	前沢区	白鳥神楽保存会
鹿踊　ザイ	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
剣舞　毛ザイ	衣川区	川西大念仏剣舞保存会
鹿角　2点	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
馬の尾　加工前	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
馬の尾　加工後	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
鹿頭	江刺区伊手	行山流久田鹿踊保存会
鹿頭	胆沢区若柳	行山流供養塚鹿踊
鹿頭	江刺区伊手	奥山行山流地ノ神鹿踊保存会
獅子頭	江刺区梁川	金津流梁川獅子躍
権現頭	江刺区稲瀬	佐野向神楽保存会
権現頭	江刺区田原	川内神楽保存会
権現獅子頭	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
幣束	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
権現獅子村内安全札	水沢区真城	瀬台野神楽保存会
獅子頭	江刺区梁川	中田太神楽保存会
御幣	江刺区梁川	中田太神楽保存会
鈴	江刺区梁川	中田太神楽保存会
獅子頭	水沢区羽田	黒田助獅子舞保存会

写真	芸能団体名
川内神楽	川内神楽
高山掃部長者	川内神楽
佐野向神楽	佐野向神楽
権現舞	佐野向神楽
烏舞	佐野向神楽
小田代神楽	小田代神楽
本八岐大蛇退治	小田代神楽
白鳥神楽	白鳥神楽
御神楽	白鳥神楽
瀬台野神楽	瀬台野神楽
権現獅子舞	瀬台野神楽
笹森神楽	笹森神楽
明神舞	笹森神楽
行山流久田鹿踊	行山流久田鹿踊
川西大念仏剣舞	川西大念仏剣舞
入剣舞	川西大念仏剣舞
一人怒者	川西大念仏剣舞
三人怒者	川西大念仏剣舞
金津流梁川獅子躍	金津流梁川獅子躍
奥山行山流地ノ神鹿踊	奥山行山流地ノ神鹿踊
行山流供養塚鹿踊	行山流供養塚鹿踊
都鳥田植踊	都鳥田植踊
本田植踊	都鳥田植踊
中田太神楽	中田太神楽
獅子舞	中田太神楽
黒田助獅子舞	黒田助獅子舞

参考文献

後藤淑（1995）岩手県前沢町八穂茂神社の仮面　民間仮面史の基礎的研究―日本芸能史と関連して―　p296-300　錦正社

後藤淑（1995）岩手県水沢市瀬台野神楽の神楽面　民間仮面史の基礎的研究―日本芸能史と関連して―　p301-309　錦正社

本田安治（1969）日本の民俗藝能Ⅲ　延年　木耳社

胆沢町史刊行会（1991）胆沢町史Ⅹ　民俗編3　胆沢町

伊藤武之進（1983）瀬嘉野系神楽口唱歌誌民俗芸能無形文化財　瀬嘉野神楽保存会

門屋光昭和（1990）淡路人形と岩手の芸能集団　キリン書房

水沢市教育委員会（1997）瀬嘉野神楽

茂木仁史（2003）　入門日本の太鼓　民俗、伝統そしてニューウェーブ　平凡社新書

森口多里（1971）岩手県民俗芸能誌　錦正社

村上護朗（1974）南部神楽―セリフ神楽

及川宏幸（2012）　行山流鹿踊―宮城県北・岩手県南に分布する鹿踊群の系譜、装束と芸態整理　東北歴史博物館研究紀要　13：49-78

司東真雄・沼山源喜治（1975）岩手の獅子頭（権現様）　岩手史談会

菅原盛一郎（1969）日本の芸能早池峰流山伏神楽 東和町教育委員会

企画展示協力

川内神楽保存会、佐野向神楽保存会、小田代神楽保存会、白鳥神楽保存会、瀬台野神楽保存会、八雲神社、笹森神楽保存会、川西大念仏剣舞保存会、金津流梁川獅子躍、奥山行山流地ノ神鹿踊保存会、行山流久田鹿踊踊組、都鳥田植踊保存会、菊美太鼓店、中田太神楽保存会、行山流供養塚鹿踊、黒田助獅子舞保存会（敬称略・順不同）

牛の博物館　郷土の企画展

民俗芸能の動物たち

2016年２月27日（土）～2016年５月８日（日）

主　　催：奥州市牛の博物館
企画展示構成：内田　宏（館長）　太田　重勝（館長補佐）
川田　啓介（主査兼上席主任学芸員）　朴沢志津江（主任学芸員）
森本　陽（主任学芸員）　髙橋　杏奈（学芸調査員）
本明　優理（学芸調査員）　小笠原聖代（学芸調査員）
発　　行：奥州市牛の博物館
〒029-4205　岩手県奥州市前沢区字南陣場103-1
Tel 0197-56-7666　Fax 0197-56-6264
発　行　日：平成28年（2016）2月27日

牛の博物館友の会

会員募集中（個人会員・家族会員）
Tel 0197-56-7666　Fax 0197-56-6264

牛の博物館友の会はいつでも、どなたでも入会できます。会員には機関紙や企画展示解説書、行事のお知らせなどをお届けします。会員の特典として牛の博物館に無料で入館できるほか、同伴者割引もあります。